アルケイア―記録・情報・歴史―
第一三号　二〇一八年一一月　四五―七九頁
南山アーカイブズ

10 000 Meilen der Sonne entgegen
「太陽に向かって万里の旅」
――南山大学第三代学長ヨハネス・ヒルシュマイヤー師の「来日旅行談」について――

リチャード・ジップル
南山大学外国語学部ドイツ学科

10 000 Meilen die Sonne entgegen (10,000 Miles towards the Sun): The Japan Travelogue of Johannes Hirschmeier, S.V.D., Third President of Nanzan University

Department of German Studies, Faculty of Foreign Studies,
Nanzan University
Richard Szippl

Archeia: Documents, Information and History
No.13 November, 2018 pp.45-79
Nanzan Archives

初めに
一　ドイツを出発するまで
二　ドイツからイタリアまで
三　ヨーロッパから日本まで
四　日本到着
終わりに

10 000 Meilen der Sonne entgegen「太陽に向かって万里の旅」

――南山大学第3代学長ヨハネス・ヒルシュマイヤー師の「来日旅行談」について――

リチャード・ジップル

初めに

二〇一〇年、南山大学では南山大学経済学部設立五十周年と南山社会倫理研究所設立三十周年記念を迎えた。それがきっかけとなり、同学部・同研究所と深く関係していた南山大学第三代学長、神言会司祭ヨハネス・ヒルシュマイヤー師（Johannes Hirschmeier, S.V.D.）の著作集を同時に記念として残すために、二〇一一年に南山大学社会倫理研究所と南山大学史料室では「『ヒルシュマイヤー著作集』編纂プロジェクト」（川﨑勝委員長・監修）が立ちあがることになった。プロジェクトの主な目的は、日本経営史の学者としてのヒルシュマイヤー師の業績を再評価することにあり、最初はその著作を「経営史の論集」と「南山学園史料集」という形で二〇一三年の終わりごろの刊行を目指していたが、最終的には著作集の刊行ばかりではなく、大規模の刊行記念シンポジウムが開催されるに至

ったのである。ヒルシュマイヤー師の著作集は、『工業化と企業家精神』[1]として二〇一四年三月一八日に出版され、記念シンポジウムは、「南山大学社会倫理研究所・南山学会　合同主催公開シンポジウム　二〇一四　工業化と企業家精神――ヨハネス・ヒルシュマイヤーの時代――」[2]として二〇一四年六月二一日に南山大学で開催された。さらに、『工業化と企業家精神』という「経済・経営史編」に続く、「教育編」というヒルシュマイヤー師の南山大学学長の立場から大学の運営、教育の実践、大学の歴史、日本の教育などについての第二の著作集として、『南山学園史料集　10　「ヒルシュマイヤー著作集　教育論」』[3]が南山アーカイブズによって刊行されたのである。

私も「『ヒルシュマイヤー著作集』編纂プロジェクト」の委員として任命を受け、ヒルシュマイヤー師のドイツ語の著作と南山大学史料室に収蔵されるヒルシュマイヤー師関係のドイツ語の史料の調査に当たった。調べたところでは、著書や学術雑誌に記載されているいくつかのドイツ語と英語の原稿を見付けた[4]。その中の一本の原稿は『西ドイツと日本』[5]のドイツ語の下書きであり、ほかに九本の英語の原稿（講演や論文・エッセー）はドイツ語に翻訳され、数本の他の著書や雑誌で既刊された論文とエッセーとを合わせてヒルシュマイヤー師の協力者の一人であった南山大学名誉経済学博士ウィーリー・クラウス（Willy Kraus）によって編集され、ヒルシュマイヤー師著作集 *Johannes Hirschmeier. Die Japanische Unernehmung: Schriften aus dem Nachlaß*（ヨハンネス・ヒルシュマイヤー。日本の企業：遺稿からの文書）として一九八六年に出版された[6]。

その他のヒルシュマイヤー師関係史料としては、ドイツの出版社・テレビ放送局・研究者等との往復書簡、講師依頼等の大学業務関係の往復書簡、ドイツ語または英語の講義や説教の草稿、そして友人・親戚・神学生時代の同級生に宛てた書簡がある[7]。これらの史料の内容を調査したところでは、特に興味深い文書を二種類見付けた。一つ目の文書は、友人と親戚に宛てたドイツ語のタイプライター打ちA4用紙二十七枚の手紙であるが、その長さから

もわかるように、普通の手紙ではない。「10 000 Meilen der Sonne entgegen（太陽に向かって万里の旅）」という表題があり、内容としては一九五二年四月一八日から一九五二年六月二一日までの来日旅行についてのReisebericht（旅行談）であり、すなわち、旅行の準備と出発、オーストリア・イタリアまでの旅、そしてスエズ運河・シンガポール・香港・マニラア経由での日本までの船旅についての記述である。[8] 二種類目の文書は、一九五〇年八月にドイツ・ザンクトアウグスティーンの神言会大神学校で共に司祭叙階を受けた三一名の同期生の約三〇年間分のニュースレターである。毎年各同期生から寄せられた近況報告は一人の同期生が抜粋してまとめたものであるが、ほとんど毎年のニュースレターにヒルシュマイヤー師の日本での活動についての近況報告が記載されている。[9]

これらの文書は、上述のシンポジウムと記念著作集でヒルシュマイヤー師の日本経営史の学者と大学の教育者としての活動についての再評価とは別の側面から、すなわち一聖職者・宣教師としてのヒルシュマイヤー師の側面からヒルシュマイヤー師を考えることによってその業績についてのより全体的な像を示す手助けになると思われる。本稿では、同期生のニュースレターについては別の機会に考察することにして、まず上述のヒルシュマイヤー師の日本への旅行談の内容を紹介し、日本で宣教活動を目指していた若い宣教師としてのヒルシュマイヤー師が抱いていた精神と抱負を紹介したいと思う。

ヒルシュマイヤー師の旅行談はLiebe Freunde（親愛なる友人）で始まる手紙の文体で書かれ、日記のように記述した日付も付けてある。文書の冒頭で記されているように、ヒルシュマイヤー師を支えてきた友人たちに対して「感謝と連帯のしるしとして」日本までの旅の体験話を聞かせることを目的としていた。[10] 旅行談の内容はヒルシュマイヤー師のドイツから日本までの約二か月の旅についてであるが、ここでその内容を「ドイツを出発するまで」、「ドイツからイタリアまで」、「イタリアから日本まで」、そして「日本到着」の四つに分けて紹介することにしたい。

一　ドイツを出発するまで

ヨハネス・ヒルシュマイヤー師は、一九二一年一〇月二八日に当時ドイツ領で第二次世界大戦後ポーランド領となった上シレジアにあったハインリッヒスドルフ（Heinrichsdorf, Oberschlesien）の農家で十一人兄弟の末子として生まれた。一九三三年に高等学校に相当するナイセにあった神言会小神学校（Neiße/Heiligkreuz）に入学してから神言会の神学生となったが、一九四一年に軍務に招集されたため、戦後の一九四五年まで修道会を離れることになった。一九四五年からドイツのザンクトアウグスティン（St. Augustin）の神言会の大神学校で哲学と神学を学び、一九五〇年八月二七日に司祭に叙階された[11]。ヒルシュマイヤー師は、一九五一年三月に神言会総本部から神言会日本管区への任命を受けたが、直ぐには日本へ出発せず、まず日本での宣教の準備のため約一年間イギリスで英語学習をすることになったので、結局日本へ出発したのは、一九五二年の春であった。

旅行談の話は、四月の初め頃ヒルシュマイヤー師が母校のザンクトアウグスティン大神学校で「出発の前に数日を過ごし、親愛なる親戚、特に母親とともに愛しい一時を過すために」イギリスから帰ってきた話から始まる[12]。その当時の海外宣教師は帰国休暇の機会が少なく、病気や事故などのために帰国できない場合もあったので、宣教師との別れは親族や神言会兄弟会員にとって重要であり、荘厳な儀式を伴うことであった。ヒルシュマイヤー師の日本への出発は四月一八日となっていた。ヒルシュマイヤー師は出発の直前の四月一六日に家族のおめでたい行事に参加することができた。「復活際後の水曜（四月一六日）に最後の儀式的な行事として、兄の結婚式の司式を行ないました。結婚式は同時に送別会となりましたが、それは結婚の喜びと別れの悲しみの両極端の激しさを和らげて、私は大変うれしかったです[13]。」

出発の日には、ヒルシュマイヤー師は神言会の古い伝統に従って朝のミサの司式の後、聖歌隊が「アヴェ・マリス・ステラ」（Ave Maris Stella）という旅行者の安全を祈る聖歌を歌った。「私は出発する兄弟会員のためにこの聖歌を今まで何回歌ったことか。今回は私自身が対象となったのです。〔中略〕私が退堂している間、全員が次の美しい歌節で終わる宣教師の送別の歌[14]を歌いました。

さようなら、この地上の旅の間、
我々が再び会うことがなくても、
喜ぶ時も泣く時もいつもイエスの心によって
我々は一つである、いまここにもまた永遠にも。[15]」

ミサの後、兄弟会員がそれぞれの食堂で朝食している間、ヒルシュマイヤー師は挨拶に回り、一人一人の兄弟会員に握手しながら、別れを伝えた。「兄弟会員との別れは、喜びの時です。それは将来の宣教師にとって数年間の憧れが実現する時が来たからです。[16]」最後に神学院の正面玄関脇の応接室で母と親戚に別れの挨拶を伝えたヒルシュマイヤー師はその時の別れの悲しさについて次のように記述している。「宣教師は『家族を英雄的に犠牲にする』という言葉を簡単に口にしますが、実際に犠牲を払うのは、少なくとも最初は、宣教師自身ではなく、その家族です。宣教師は若い情熱や新しいもの、偉大なものへの魅力に元気づけられますが、彼が残した者は彼の不在を感じるだけです。家族が涙をもって払った犠牲の上に神の祝福がありますように。[17]」

二　ドイツからイタリアまで

四月一八日、ヒルシュマイヤー師はドイツと別れを告げ、日本への二か月の長い旅に出た。イタリアのジェノヴァから横浜行きの船に乗ることになっていたが、ジェノヴァまでは数回の行程に分けて、オーストリア、ヴェネツィア、フィレンツェ、そしてローマ経由での二週間の鉄道の旅であった。最初の行程はボンからシュトゥットガルトまでであった。ライン川に沿って南の方へ走っていた列車の窓から眺めていた景色について次の祈りを込めたことばで記述している。「美しいライン川の道のりを走っていたとき、斜面に咲いていた花と青葉は故郷からの別れの花束のように見えました。美しい故郷よ、さよなら。ごきげんよう！神が汝を祝福したまえ。私はこれから汝の使者として出ていく。汝の最もよいもの、汝の信仰を桜の国に伝えるために。[18]」ドイツのライン地方は、ヒルシュマイヤー師にとってある意味では第二の故郷であったと言えるかもしれない。というのは、生まれ故郷の上シレジアは第二次世界大戦後、ポーランド領となり、そこに住んでいた多くのドイツ系人は移住させられ、ヒルシュマイヤー師の母をはじめ親戚がザンクトアウグスティンの近くに住み着いたからである。

ヒルシュマイヤー師はボンを出てからシュトゥットガルトで用事があって一泊したが、翌日の四月一九日にオーストリア・ザルツブルクで数時間見物した後、ビショフスホーフェン（Bischofshofen）にある神言会のザンクトルーパート修道院に着いた。旅の途中で列車の窓からの山の景色について次のように記している。「夕焼けの中で山の風景は巨大でファンタスティックな印象を与えました。アルプスを見たのはこれが初めてでしたので、すべては私にとって新しいものでした。[19]」

ヒルシュマイヤー師がザンクトルーパート修道院に寄ったのは、同じ神言会の司祭である実兄のアロイス・ヒル

シュマイヤー師（Alois Hirschmeier, S.V.D）[20]に会う予定があったためであった。兄のアロイス師は、一九三六年に司祭に叙階され、一九三七年から一九五二年頃まで中国での宣教に従事していたが、当時の中国で起きていた動乱の中で足を撃たれたため一九五二年一月にヨーロッパに帰り、ウィーンで治療を受けていたのである。しかし、結局兄に会うことができなかった。がっかりしたヒルシュマイヤー師は、その失望感を次のように記述している。「前回兄と会ったのは一四前のことでしたが、今彼がせっかく宣教地から帰ってきていたのに、私は会うことができずに行ってしまいました。彼は手術したばかりの足のため、そのうえ「鉄のカーテン」[21]のために来ることができなかったのである。[22]」

四月二三日、ヒルシュマイヤー師はザンクトルーパート修道院を出発して、二四日にヴェネツィアに着いた。ザンクトルーパートからは、同じく神言会日本管区への任命を受けたフランツ・トルッケンブロード師（Franz Truckenbrod, S.V.D）[23]と二人で旅を続けることとなった。ヒルシュマイヤー師は、ハンガリーのドイツ系家庭に生まれたトルッケンブロード師の名字（文字通りには「乾いたパン、つまり古くなったパン」という意味）に言及しながら、次の語呂合わせで彼を紹介している。「皮肉なことに、この若い神父は決して面白味のない人ではなく、かえって『おどけた性質』で素敵な人物です。三か月ぐらいロンドンで一緒にいたので、互いに自己紹介を交わす必要がありませんでした。[24]」実は、ヒルシュマイヤー師は旅行談の中で数回トルッケンブロード師の冗談と面白いエピソードについても述べている。たとえば、イタリアに行く途中で空腹になった時、トルッケンブロード師がイタリアのオレンジについて話したことを次のように記述している。「『おいヒルシュ、もうイタリアに着いていればよかったのに。』とトルッケンブロード神父が嘆きながら言った。『そこのオレンジはジャガイモのようにたくさんあるのだ。着いたら、オレンジをたっぷり食べなきゃ。』」しかし、ヒルシュマイヤー師が説明しているように、二人がイタリ

アに着いたら、オレンジ一個は一五リラ（一五プフェニヒ）だったので、「私たちは罰としてオレンジを一個も買うことができませんでした。[25]」

四月二三日の夜遅く、二人はヴェネツィアに着いた。翌日、二人は聖マルコ大聖堂とドゥカーレ宮殿だけではなく、ヴェネツィアの有名な運河やその他の主な観光地を回り、見物で一日を過ごした。ヒルシュマイヤー師は、特に聖マルコ大聖堂に深く印象づけられた。「大聖堂はとても広くて、高いという印象よりも荘厳な印象でした。」ドゥカーレ宮殿についても、似たような印象を受けた。「宮殿は信じられないほど豪華に飾り立てています。基調はすべてにおいて徹底的にキリスト教的です。[26]」

翌日の四月二五日に、二人の宣教師はフィレンツェに着いた。本来二四日の夜行列車で行く予定であったが、結局乗り遅れた。ヴェネツィアと同様に、フィレンツェでの見物もヒルシュマイヤー師に深い印象を残した。特にその文化都市としての雰囲気が気に入った。「建築監督局は、アメリカ風のコンクリート作りの建物によって堅固な宮殿の都市の外観が損なわれないように監視していた。[27]」後で述べるように、旅行談の中に数回にわたって同じように伝統的な街づくりへの近代的なアメリカ風の建物の影響についての指摘がある。

ヒルシュマイヤー師にとって町並みと都市風景の他に印象的だったのは、サンマルコ修道院に飾ってあるルネサンス時代の名匠フラ・アンジェリコの宗教画であった。「フラ・アンジェリコはそこに住み、絵を描きました。私は絵画（フレスコ画）の物語る敬虔さと質素さの魅力にとらえられて、そこを離れることができなかったほどでした。食堂で偉大な『晩餐』の前に腰を掛けましたら、まあ驚いた！何という愛情！この男は絵を描いたというよりも祈ったといった方が正しいでしょう。そのことは彼の絵を見て感じました。そして階段を上ったところ、『神のお告げ[28]』の絵の前に立ちどまりました。これは、私が知っている神のお告げの絵の中で、もっとも愛情をこもった

ものです。私は眺めて、ただ眺めるしかでませんでした。[29]」

四月二六日、二人はフィレンツェを出発してローマに着いた。ローマにあるカトリックの本山であるバチカンはカトリック信者にとって最大の巡礼地である。また、神言会総本部とローマの諸大学で勉強する神言会会員の修道院もあるので、宣教活動のために日本に旅立つ宣教者にとって特に意味深いところであった。ヒルシュマイヤー師も巡礼者のような気持ちでローマの訪問を待ち望んでいた。「次はローマです。私は自分の思いと考えをまとめようとしてみました。私はもうすぐ数多くの巡礼者の目的地である『永遠の都』ローマを見るのです。私も巡礼者としてお祈りに行きます。将来の宣教活動のためにたくさんのお祈りを捧げたいからです。[30]」

ローマでの滞在は十日間もあったが、その間ほとんど毎日教会巡りと町の見物に出かけた。ローマに着いた翌日、ザンクトアウグスティン時代の同級生のヨハンネス・ジットカ師（Johannes Rzitka, S.V.D.）と一緒にカトリック本山のバチカンにあるサン・ピエトロ大聖堂に出かけた。ヒルシュマイヤー師はここでも、やはり教会の建築と宗教美術に魅了されて、次のように述べている。「ここに中世末期の最高の記念碑としてサン・ピエトロ大聖堂が建てられました。この大聖堂はキリスト教の一致の記念碑、いや異教世界とキリスト教世界の文化の最も貴重なものの融合をもたらしました。時々異教世界のものが前面に押し出されますが、しかし最も大きな印象は、融和やすべての自然のあらゆる価値の神の恩寵による高揚と美化、そして自然と超自然の調和的組み合わせです。」同大聖堂にあるミケランジェロの傑作の聖母子像『ピエタ』にも魅了され、次のよう記述している。「もしかするとこれは偉大な芸術家の作品の中で最も美しい、少なくとも最もキリスト教的なものと言えるかもしれません。[31]」

もう一つ印象的であったのはサン・ピエトロ大聖堂内にある聖体礼拝堂であった。この礼拝堂の祭壇の上にミサの時に聖別されたキリストの聖体が安置され、信者がその前に礼拝するところであるが、ヒルシュマイヤー師は、

その小聖堂の祭壇の芸術美を高く評価するとともに、聖体に対する信仰を燃え立たせる雰囲気に魅了されて次のように記述している。「礼拝堂はとてもきれいで、祭壇も豪華ですが、最も大事なのは救い主キリストです。その点においては、大聖堂はドイツや日本のどの教会よりもまさっているわけではありません。司祭がミサを捧げる至るところで救い主がサン・ピエトロ大聖堂と全く同じようにおられるからです！」[32]

ヒルシュマイヤー師がサン・ピエトロ大聖堂の中で最後に訪ねたところは、キリストの弟子の頭、使徒聖ペトロの墓であった。大聖人の前で捧げたお祈りについて次のように記述している。「私も、人間的な弱さと愛想の他に救い主キリストへの愛の熱心を持っていた最初の教皇の取次ぎによってお祈りしたいことが多かったです。これからの宣教活動のためと自分個人のためだけではなく、親愛なる皆さんのためにもお祈りしたかったのです。」[33]

サン・ピエトロ大聖堂についてローマの四大聖堂の中で最も有名なのは、サン・パオロ・フオーリ・レ・ムーラ大聖堂である。「フオーリ・レ・ムーラ」はイタリア語で「城壁外」すなわち古代ローマの中心地から離れたところという意味であるが、ヒルシュマイヤー師がローマに着いてから最初に捧げたミサは、使徒パウロが殉教したと伝えられている地の上に建てられたこの大聖堂でした。「異教徒に福音を述べ伝えるためにキリストの僕となった聖パウロ！世界と同じ大きさの心を持っていた史上最大の宣教師！彼の弱い後任である私たち現代の宣教師たちは、彼の精神をどれほど必要としているでしょう。」[34]

ヒルシュマイヤー師は全部で十日間ローマに滞在したが、その間、ローマの大学で勉強していた神言会会員たちに案内されてトルッケンブロード師と他に中国への任命を受けた宣教師と一緒に上に述べた大聖堂の他にいくつかの有名な聖堂や巡礼地でお祈りしたり、ミサを捧げたりした。イエズス会の母教会に当たるジェズ教会では、「日本への最初の宣教師の聖フランシスコ・ザビエルの祭壇でミサを捧げることもできました。」[35]

ローマ市外にあるもう一つの有名な巡礼地はカタコンベである。ヒルシュマイヤー師は、キリスト教の初代殉教者の地下墓地であるこの聖地でインドネシア人の神言会員の後に東方典礼カトリック教会の司祭の隣の祭壇でミサを捧げた。ヒルシュマイヤー師にとって、これはカトリックの信仰の国際性の現れと考え、次のように記している。「こうして、コロッセオでの大集会で共産党員が平等と連帯について演説していたと同じ時間帯に、私たちは自己流にキリストにおける『民族間の同胞精神』を具体化することができました。[36]」

ヒルシュマイヤー師にとってローマ滞在中の頂点は、他の何よりも教皇司式の行事への参加と教皇の一般謁見参加であった。当時の教皇は外国訪問をはじめバチカン以外の行事がほとんどなかった時代であったので、自分の目で教皇を見ることはめったにないことであった。五月四日にヒルシュマイヤー師はサン・ピエトロ大聖堂で行われたある修道女会の創立者の列福式に参加することができ、教皇ピオ十二世を見た時に大変感激し、その気持ちを次のように記述している。「信じられないぐらいの幸福感に満ち溢れました。あの方がキリストの代理者、キリスト教徒の指導者です！その間ずっと教皇の姿から目を話したことはありませんでした。なんと慈悲深く、父性愛に満ちた姿勢で祝福を与えながらあらゆる方向に身を傾けていました。〔中略〕退堂の前に最後の正式の祝福を与えるに当たって、まず、神さまの慈悲の豊かさのすべてが私たちの上に下るよう両手を広げて祈り求める姿は私にとって一生忘れられません。[38]」

ローマ滞在の最後の午前中、ヒルシュマイヤー師は一人で「サンタ・マリア・マッジョーレ（偉大なる聖母マリアにささげられた）大聖堂」へ祈りに行った。「私は最後の日の朝早く聖母に旅行の上に祝福を祈り求めるためにサンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂に行って別れの祈りを捧げ、同日の午後、同様にサン・ピエトロ大聖堂で『別れの祈り』を捧げました。〔中略〕最初の訪問と同じ道をたどり、まずピエタ、次に聖体礼拝堂、そして聖ペトロ、

聖アンドレアス[39]、聖シモン[40]、聖ユダ[41]、大聖グレゴリオ[42]の順で、最後に福者ピオ十世[43]の墓の前でお祈りを捧げました。海外の宣教師として、すべての愛する人たち、自分の青春の世界と別れて出かけようとしている私は、教会の偉大な諸聖人に願いたいことが多かったのです。[44]」

三　ヨーロッパから日本まで

五月五日の夜、ヒルシュマイヤー師とトルッケンブロード師は夜行列車でジェノヴァに向けて出発した。二人は、出発の前にローマで勉強中のザンクトアウグスティンの大神学校時代の同級生三人と一緒に簡単な送別会を行った。「私たちが共にした過去の経験が話題になり、まじめな話もあれば、楽しい話もありました。私たちは親しい友として互いのつらい経験もよく知っており、司祭叙階までの道を共に歩んで来たのです。会話の終わりごろ、ジットカ神父が嘆きながら次のように言いました。『私と一緒にフルートを吹く時間をつくらなかったのではないか。』〔中略〕昔の友情を込めたあのメロディーが最後の演奏で響いた。『もし離れたとしても、真の友情はゆらぐことはない。思い出の中で生き続き、その忠実は忘れられない。[45]』

翌日の朝、夜行列車でジェノヴァに着いた二人は、午後に日本行きの船が入港するまで時間があったので、ジェノヴァの名所を見物して、午後から出国手続きと船に乗る準備をすることにした。日本への船はオランダ籍の貨物船「ブリタール」号（Blitar）[46]であった。当時の多くの貨物船と同様に、貨物の他に一般乗客を収容できる宿泊設備も整っていた。日本行きの両宣教師の他に三〇年ぶりの帰国休暇を終えてフィリピンに戻る神言会司祭ヨゼフ・デユーゼムント師（Joseph Dusemund, S.V.D.）、二人のオランダ人男性、一人のスイスの若い女性、イギリスの夫婦、

そして子供三人を連れていた二人のオランダ人女性と一人の若いオランダ人女性の同乗客もいた。[47]

日本への約六週間の船旅は五月七日の昼から始まった。[48]途中でポートサイド、スエズ運河、シンガポール、香港、フィリピン経由で数回寄港することになっていたが、ヒルシュマイヤー師は、船上の生活や各立ち寄り先で見たことや出会った人々についていろいろ記述している。まず、スエズ運河までの旅程は天気がそれほど暑くなかったようであった。「天気はまだそれほど暑くない。これからもこの調子で続けば私は耐え抜くだろうが、トルッケンブロード神父はミサの時にかなり汗をかきます。[49]」実は、以下で述べるように、二人は、特にトルッケンブロード師はスエズ運河に入ってから日本までの間続いた暑い天気でずいぶん苦労した。

ヒルシュマイヤー師は船上の生活について次のようにかなり細かく記述している。「船の中を案内しましょう。まず、私たちが泊まっている『一号室』は船室のなかで一番狭くて、いす一台と机として使用できる小さいたんすがあります。荷物はベッドの下に置きます。『トルッキー』神父は二段ベッドの下の段で、私は上の段で寝ています。〔中略〕それに温水と冷水の水道付きの洗面所がありますが、まもなく温水しか出なくなります。最後に、二つに分けられた洋服タンスがあります。これが私たちの道具全部です。[50]」

船の他の設備としては、乗客と船長・高級船員と一緒に食事をする食堂と図書やラジオ、レコードプレーヤーや肘掛け椅子などが備えてあるサロンもあったが、あまり暑かったので利用することは少なかったようである。[51]しかし、毎日朝早くミサを捧げる習慣があった二人の司祭にとってもっとも重要なのは小聖堂であった。「船上にきちんとした小聖堂もあります。船医が不在なので、その部屋が小聖堂に合うように作り直されています。私たち神言会司祭三人はここでミサを捧げています。オランダ人は別の空室を使っています。ここに必要なものが全部揃っています。祭壇からミサ用具、ホスチア（ミサ用のパン）とワインまで。ロッテルダムロイドは宣教師の運送で十分

お金を稼ぎますから、これぐらいのことをしてくれてもいいでしょう。[52]」

最初の立ち寄り先はポートサイドであった。ブリタール号は入港せずに、荷船を使用して荷物の一部をおろしたが、作業がまだ終わらないうちに、現地の商人がボートで船までものを売りにやってきた。ヒルシュマイヤー師はその様子について次のように記述している。「革製品が彼らの得意で、財布からカバンやスーツケースまであります。ヨーロッパに比べると途方もなく安いです。革製品ならここが世界一安いと言われています。〔中略〕私もカバンの取引のためにボートに降りた時、商人は友情の印として私の頭にフェズを被せたが、それでも私は騙されませんでした。少なくともそれほどでも騙されませんでした。[53]」

五月一六日にビルタール号は紅海に入り、毎日三回ぐらい着替えをしなければならないほど暑くなった。ヒルシュマイヤー師は、毎朝早く起きてデッキに長さ七メートル幅四メートルほどの小さなプールに入って、体を冷やすことにしていた。「他の人がまだ寝ていて、ドゥーゼムント神父だけがお祈りしながらデッキを行ったり来たりしています。私が彼のお祈りの邪魔にならないことを願っています。〔中略〕私は午後からもプールに入り船員と一緒にいたずら小僧のように暴れたりあちらこちらはね回ったりします。[54]」

トルッケンブロード師もよくプールに入ったが、独自の方法を見付けた。ヒルシュマイヤー師はトルッケンブロード師の発明才能については次のように冗談に記述している。「トルッケンブロード神父はどちらかというと『静かな享楽主義者』のような人ですので、彼は一人だけでプールに入ります。彼はもっと精神的な風味を添えるために自分なりの方法を発明しました。彼は梯子にロープを結び付け、防暑帽をかぶり、身体にロープの反対部分を結び付けて水の中にうずくまるように座りながらリルケの詩を読んでいます！（リルケ自身がこの光景を見れば、何と言うでしょう！[55]）」

絶えず続く暑い天気は先ほど触れた毎日のミサの時に祭服を着ていた司祭たちにとって大きな問題であった。ヒルシュマイヤー師は小聖堂として使っている船室の暑さについて次のように記述している。「空気が鉛のように重く感じます。汗は背中と脚から流れ落ちてしまいます。トルッケンブロード神父は、汗が口に入り、聖体拝領前の断食・断飲の反則[56]にならないように注意しなければならないと言っています。[57]」

紅海に入ってから次の立ち寄り先のシンガポールまでは一番長い期間であったが、暑い天気がずっと続くなか、読書するぐらいのことしかできなかった。「この暑さは活気を奪ってしまい、殆ど何もできません。〔中略〕私がかつて希望していた熱帯地に任命されていないことを神に感謝するようになりました。熱帯地で働いている宣教師たちに脱帽！彼らは、いつもこのような暑さに耐えて、デッキ・チェアに座り英語の本を読むよりももっと大事なことをしているのです。[58]」

シンガポールまでのインド洋の航海中、暑さに次いでもう一つの悩みがあった。それは船酔いであった。五月二十二日はイエス・キリストが復活四十日後天に上げられたことを記念する「キリストの昇天」という大祝日に当たり、宣教師同志でワイン一杯のお祝いをしようとヒルシュマイヤー師は思っていたが、船がかなり揺れていたので体調を崩して、結局できなかった。船酔いの悩みについては次のように記述している。「海流と風は私たちのお祝いに好意を持っていませんでした。私は一日中頭痛があり腹も少し横傾斜しています。〔中略〕自分の船室にいるのは一番苦痛がない。〔中略〕揺れには一つだけ足りないものがあります。それは『眠れ、王子ちゃん、ぐっすり眠れ』というゆりかごの歌です。不思議なことに自分がゆりかごに寝ていたころ、揺れに意義はなかったのですが[59]」

長い旅が続くと、倦怠感を緩和するために二人の宣教師はダブルスペアでイギリス人夫婦とデッキで卓球試合を

したこともあった。「試合が終わったら私たちは、とりわけ汗の記録者トルッケンブロード神父は海のなかからすくい上げられたように見えた。夜十時の気温は三十五度です。[60]」暑さのため、船室で過ごす時間よりはデッキで過ごした時間の方が多くて、暑さに弱いトルッケンブロード師はデッキの上で寝ていた。ヒルシュマイヤー師は時々デッキでギターを弾いていたが。ある日、トルッケンブロード師との面白いやり取りの場面について次のように記述している。「トルッケンブロード神父がやってきて、『あのね、ヒルシュ、あの歌の題名は何だったっけ？「ライゼ・リーゼルト・デア・シュネー」』（Leise rieselt der Schnee）[61] 私が『なぜ？』と聞くと、彼は『まあ、雪のことを言っているだけだ。』と答えた。そうしたら、私たち二人で歌い始めた。

雪がさらさら落ちる。
湖は静かで固く凍っている。
森はクリスマスらしく美しい。
まあまあ、待っていてね。すぐにキリストキントが来るのだから。[62]」

次の立ち寄り先はシンガポールであった。入港している間、それぞれの名所を回り、見物をしたが、ヒルシュマイヤー師にとって特に印象深かったのは市場であった。その賑やかな光景について次のように記述している。「私は東洋の都市について読んだことと写真を見たこともあるが、街頭の賑わいは体験しないとわからないのです。何千軒の店の商人たちがいて、丸ごとあるいは半分に切ってある果物の一山、魚の干物の一握り、たばこの数箱、シャツ五枚を道端に広げるだけで、ほら店はでき上がり！もっと『キチンとした』商店では、同じ部屋に同類のものを売っている『店』が四、五軒ぐらい並んでいます。商人たちはそれぞれの何かの一山を自分の前に広げています。眠くなったらそのそばでまたはテーブルの上で寝るのです。小さい子供がそこで遊んだり、歩けない子供は床をは

い回ったりします。〔中略〕店はいつも営業中―朝、昼、晩、夜。それでいいじゃないでしょうか。彼らはみな自由な人ですから。[63]」

ヒルシュマイヤー師はヨーロッパで見られないものに魅力を感じた。「彼らの生活は簡素で、物価が安い。暖房の必要もなく、食事は質素です。〔中略〕家に住んでいるというよりは道端や店の中で生活しています。複雑な生活をしている私たちヨーロッパ人の方が気の毒ではないでしょうか。[64]」しかし、この珍しい世界の魅力は無限ではなかった。タクシーでシンガポールの名所を回り、公開されていたヨーロッパ人や華僑の豪邸やその庭園を見物もしたが、宣教師の目で物を見ていた彼は、ヒンズー教の神話に出てくる神々や動物の彫像が飾ってあった庭園については次のように記述している。「それは全体としては人間味を大いに示していましたが、やはりにやにや笑う異教徒の神々の彫像でした。中国人やマレーシア人の古い異教世界とキリスト教から『脱却してしまっている』ヨーロパの新しい異教世界の中に生きているここのカトリック教会は、賑やかな港湾都市から無視されている小さな存在です。[65]」

五月二九日にブリタール号はシンガポールから次の立ち寄り先の香港に向かって出発した。香港に着くまで再び単調な船上の生活を送るようになったヒルシュマイヤー師にとって最も過ごしやすい時間は夜であった。デッキの上に座って、ギターを弾いたり歌を歌ったりしていると、ザンクトアウグスティン大神学校とドイツの故郷、家族と友人を懐かしく思い出した。「私はもう一度「アヴェ・マリス・ステラ」Ave Maris Stellaや宣教師の出発の歌を歌い、出発した時の気持ちを再び体験します。特に宣教師の送別の歌の歌詞に再び感動します。[66]」

六月一日はカトリック教会の典礼暦で「聖霊降臨[67]」という大祝日であるが、神言会ではとりわけ大事にされている祝日でもある。ヒルシュマイヤー師は他の二人の神言会兄弟会員と一緒にお祝いした様子を次のように記述して

いる。「今日、使徒たちに世界をキリストに導くという使命のために聖霊の力が与えられました。私たちも、特に日本での活動のためにいただきたい言語能力の賜物をはじめ、聖霊の力を大いに必要としています。午後に私たち宣教師三人が集まり、デユーゼムント神父の音頭に従って『聖霊に敬意を表して』ワインで乾杯しました。[68]」

六月二日にブリタール号は九竜に寄港した。中国で宣教活動ができなくなり出国を余儀なくされた数名の神言会会員が香港島に滞在していたので、ヒルシュマイヤー師はトルッケンブロード師とデユーゼムント師と三人でフェリーに乗って香港に渡ることにした。フェリーに乗った時に、奇妙な「事件」が起こった。ヒルシュマイヤー師たちは贅沢せずに生活している宣教師としては二等切符を買って二等客室に入ろうとしたところ、乗組員は二等客室ではなく一等客室に乗るように案内した。乗組員に従わず、二等客室に入ることに拘ったヒルシュマイヤー師たちの姿を見た他の乗客は驚いた。ヒルシュマイヤー師はそのエピソードについて次のように記述している。「私たちは恐らく二等室に入った最初のヨーロッパ人だったのかもしれません。それはともかくとして、『大騒ぎ』を引きおこしてしまったのです。[69]」

神言会会員は香港の司教座聖堂の敷地内の施設に宿泊していたが、ヒルシュマイヤー師たちが神言会の宣教師と面会を求めたら、それほど温かくないもてなしを受けた。「その対応は私たちにとって同じ修道会の兄弟会員にしては少し冷たい感じがしました。」しかし、翌日ヒルシュマイヤー師が一人で再び訪問した時に、カトリック聖職者の正装（黒い服装と白い襟）をしていたため大変温かく歓迎され、活発な会話を楽しむことができた。「そこにヨーロッパまで帰る船の便を待っていた、かつて中国で働いていた宣教師たち数名が集まっていた。彼らは中国についていろいろの話しをして、私の方から十年あるいは二十年以上帰国したことのない彼らにドイツについていろいろ話しました。[70]」

ヒルシュマイヤー師はブリタール号から硝石、鉄のパイプ、木箱に入った様々な商品、自動車などの荷物が下ろされていた間、港の賑わいを楽しんでいた。その風景を次のように記述している。「ブリタール号のそばに十隻以上の平低のジャンクが揺れながら積み荷を待っていました。一隻がいっぱいになったら、大きな黒い帆を上げ、港を通って中国への針路を進めました。このジャンクは比類のないものであり、絵のように非常に美しいです。前部でクレーンが荷物を下ろしたりしている間、後部の『住まい』では家族が平気な生活を送ります。食事を作ることも取ることも、洗濯することも寝ることも全部船の上です。〔中略〕トルッケンブロード神父はイタリアで買っておいたボンボンで子供たちの好意を受けました。心情から発するこの言葉の意味が子供たちには良く分かったようです。[71]」

六月九日にブリタール号は日本到着前の最後の立ち寄り先のマニラに入港した。カトリック信者が多い国でありながら、司祭が足りないだけに神言会の宣教活動が活発的であったので、日本の到着を前にしていた若い宣教師たちの心の中に自分の将来の活動への熱意がわいてきていたに違いないだろう。ヒルシュマイヤー師はその時の気持ちについて次のように記述している。「マニラでの四日間は私にとってこの長い旅の中で一番素晴らしい体験でした。〔中略〕神言会の神学校で非常に暖かい歓迎を受けました。私たちは我が家に帰ってきたような感じがしました。白いスータンを着ていた親切なドイツ人の兄弟会員たちが多く、私たちに気を配ってくれる人々がたくさんいたからです。」ヒルシュマイヤー師は、特に同級生のヘーゼン師（Heinrich Heesen, S.V.D）との再会を喜んでいた。「私たちは喜びのあまり勢いよく互いに抱き付くところであった。彼はクリスマスの前からここに到着して、宣教師生活の最初の経験、とりわけ語学学習をすでになし遂げた。〔中略〕彼は元気よく、情熱にあふれていて短時間でフィリピンをすっかり気に入りました。私たちがマニラにいた間、彼は同行し、案内してくれました。[72]」

マニラの見物で特に面白かったのは、大都会の賑やかな交通と街並みの近代的なものと伝統的なものの対照であった。ヒルシュマイヤー師はそれについて次のように記述している。「私はマニラで三種類だけの乗り物を見ました。ニューヨークの最新の流行を含めての新しいアメリカの自動車、人間をはじめ鶏やウサギまでありとあらゆる生き物を運搬するバス、そして最後にもっとも独創的なもの、すなわち小さいバスに改造されたジープでした。〔中略〕マニラのもっとも近代的なのは道路です。アメリカ風の新しいコンクリート建物、例えば学校や政府の建物がたくさんあり、一部は美術的に見て美しいものもあります。しかし建物の中で一番多いのはバナナの木やその他の緑生い茂った熱帯植物の間に建てられている木造の小さな家屋です。この対照は『人がシルクハットをかぶって裸足』でいるような印象を与えます。[73]」

神言会は一九〇九年からフィリピン各地で小教区の司牧と学校教育をはじめ、様々な宣教活動に従事していた。ヒルシュマイヤー師たちは神言会が担当していたマニラ市内の教会の他に、他の修道会の学校も訪問した。「マニラの特長として挙げられるのは、まず学校が多いということです。四つの大学もあります。最も古く最もレベルが高いのはドミニコ会が運営している聖トーマス大学です。〔中略〕フィリピン人は教育に大変熱心です。宣教師の話では、最後の一頭の水牛を売ることが必要な場合ですら、息子と娘を学校に行かせなければならないそうです。大学の他に多数の高等学校があり、その多くは修道会が経営しているものです。〔中略〕私たちの「ブルー・シスターたち」（聖霊会）[74]の聖霊高等学校を見学することができました。興味深いのは、教室と教室との間に薄い木造の壁しかなく、換気のために壁の上の部分が空いていることです。最初の教室から最後の教室まで一語一語が聞こえますので、ここで教員になるには特別な才能が必要でしょう。私は向いていないと思います。[75]」

フィリピン人の信者の熱心な姿を見たヒルシュマイヤー師は、感心するとともに宣教活動の大切さを痛感して、

次のように記述している。「水曜日の午後、私たちはマニラ市外にある『絶えざる御助けの聖母』教会まで行きました。あらゆる苦しみを持っている人々がやってきて、助けと慰めを祈り求めます。ここまで巡礼してくる人々の人数は信じられないほどです。〔中略〕教会には壁がありません。それはフィリピンでよく見られることですが、教会の建物の外に立っている人々も参加できるようになっているからです。教会の中にいる人々よりも外にいる人々のほうが多いです。〔中略〕信者たちの信心深さは、時々表面的なところや宗教的迷信があっても間違いなく純粋です。人々は善意ですが、司祭が少なく教育も足りないのです。[76]」

六月九日の午後にマニラを出発する前に、ブリタール号の船上で数人のドイツ人宣教師に囲まれて日本行きの二人の送別会が開かれた。その日は台風の影響でマニラ市内は大雨だったが、ブリタール号は予定通り五時半に神戸に向けて出発した。ヒルシュマイヤー師は、波が高かったので、ちょっと気分が悪くなったが、トルッケンブロード師は「本物の嵐を」体験したい、それがないとまともな船旅にはならないと言っていた。しかし、皮肉なことに船酔いをしたのはヒルシュマイヤー師ではなくて、トルッケンブロード師であった。ヒルシュマイヤー師は、そのユーモラスなエピソードを次のように記述している。「面白いことに船の揺れが大きくなればなるほど、私の胃が落ち着いてきました。トルッケンブロード師はどこにも見つかりません。彼は夕食の時に額に汗して、真っ白な顔をしていました。『おや、いったいどうしたのだ?』と私は聞きました。彼は歯を食いしばったが、二分後に急いで食堂を出てしまいました。私としては食欲が前とちっとも変りませんでした。〔中略〕ベッドの上に寝ていたトルッケンブロード師に『船酔いか?』と聞いてみると、彼は『船酔いというわけではない。胃の調子がちょっと悪いだけだ。』と答えました。いずれにせよ彼の嵐への切望がかなったのです。[77]」

四　日本到着

六月一六日の夜、ブリタール号は神戸港に入港した。二人の宣教師たちは最終目的地の横浜で船を下りることになっていたが、一九日に横浜に向けて神戸を出発するまでの間、神戸と京都の見物で時間を過ごした。ヒルシュマイヤー師は、日本についての最初の印象を次のように記述している。「神戸での最初の散歩はちょっとつまらなかったです。世界のどこにも見られるような平凡な巨大都市の印象を受けました。港の近くにはアメリカ風のコンクリート建物がありましたが、人々は細い目を持っていて、看板は日本語で書かれていたし、下駄（底下にブロックがついている木でできているスリッパ）をはいて和服を着ていた女性も見かけました。狭い道に出たら、小さい和風の木造の建物もありました。単調な暗褐色で地味ではあったが、清潔できれいな感じがしました。[78]」

時間があったので、日本語ができない、道もわからない二人の宣教師は大胆にも京都まで行って見物することにした。「私たちは寺院や御所で有名な昔の都である京都へ見物に行きました。自分でも私たちの冒険心に驚きました。日本のお金を少しだけポケットに持っていて、日本語を一言も言えないのに六十キロのところまで半日の遠足に出かけるなんて！[79]」幸いに神戸駅で英語ができる日本人に大阪までの列車の乗り場を教えてもらい、そして大阪駅でドイツ語が話せる日本人に京都までの列車の乗り場を教えてもらい、無事に京都に到着した。京都で受けた印象については次のように記述している。「精通者の話では京都を見るには一週間がかかるそうですが、ローマも午後四時から八時までに全部見ることはでききません！それにもかかわらず、数時間でもその美しさを垣間見ることができました。私たちは二つの名所を見ました。一つ目は御所の庭園ですが、その中にこけ園、牧歌的な湖沼、緑の屋根状におおわれた石造りのアーチ橋、心の静まる茶屋もありました！二つ目は神道の最も重要な聖城の一つで

ある平安神宮です。正直に言えば、その優美で上品な形態を目の前にして日本のものに『一目ぼれ』したような気がしました。この芸術形式、この神社の中になんという豊かな精神的な調和と鋭敏な感受性や畏敬の念が潜んでいることか。トルッケンブロード師はそれを『壮大な優美』（monumentale Zierlichkeit）と呼びました。[80]」

六月十八日の午前中に、ヒルシュマイヤー師は一人で再び神戸市内を見物することにした。前日見た風景と対比しながら次のように記述している。「翌日、私は独力で再び神戸の散歩をして、驚いたことに活気のある商店街、和風の門のアーチや『お菓子の家』のように小ぎれいな商店、つまり『日本的な神戸』を発見することができました。その夜、感激のあまりでトルッケンブロード師を同じところに連れて行きました。街灯や提灯の明かりで街並みはもっと華やかで魅力的に感じました。〔中略〕私たちは船へ戻って、今まで受けた印象とこれから日本で私たちを待ち受けることについて長く話をしました。[81]」

六月二十日にブリタール号は最終目的であった横浜港に入港した。ヒルシュマイヤー師はドイツから二か月の長い旅を無事に終えた。二人の宣教師は横浜港まで迎えに来た当時の神言会日本管区長ゲマインダー師（Georg Gemeinder, S.V.D.）と一緒にジープで吉祥寺にあった神言会の聖アルベルトハイムまで行った。長い旅を終えてようやく日本に着いた時の気持ちについて次のように記述している。「狭い道からアルベルトハイムの敷地内に曲がった時に、二人の女性コックさんが深いお辞儀をしながら私たちを歓迎してくれました。私たちは荷物を下ろしてからすぐに小聖堂に入って、日本に無事についたことを感謝して共同体と一緒にマニフィカト[82]を歌いました。本当に心から歌いました！あとで、アルベルトハイムの五人の兄弟会員に囲まれてワインで乾杯して、やっと我が家に着きました！[83]」

二人の宣教師はアルベルトハイムに二日滞在した後、ゲマインダー管区長と一緒に急行列車で名古屋に行き、二

週間後、九月に東京で日本語学習が始まるまで多治見の神言修道院に滞在することになった。ヒルシュマイヤー師は、七月九日付で旅行談の執筆を仕上げるまでの間について次のように記述している。「名古屋に一四日間滞在してから、管区長は私たちを日本管区のかつての中心となる多治見修道院までジープで連れて来てくださいました。名古屋の滞在期間は、南山大学、神言神学院、シスターの修道院、神言会の教会を回り、管区長館で簡単な手伝いをしました。多治見では、日本についての文献を読み、日本語学習の最初の一歩を踏み出して、そして年間の黙想を済ませてから日本語の学習のために東京に戻ることになっています。箸の使い方は早く覚えました。ナイフとフォークがなく、結局箸を使わないといけませんので、すぐにできるようになるのです。もっと難しいのは正座することです。聖堂では畳の上でひざまずいたり正座したりしてお祈りをしているが、後ろに『訓練されていない新人』のために長椅子が用意されています。最初の二、三日は主の祈りを唱えているうちぐらいは耐えましたが、今は三、四分ぐらいできるようになりました。最初は特に膝腱がかなり痛くなります。[84]」

しかし、箸や正座よりも日本語がもっと大きな挑戦であった。ヒルシュマイヤー師は日本語についての最初の印象を次のように記述している。「日本語については長い戦いに備えて勇気を鼓舞しています。それは三十年戦争になるのでしょうか。ある神父さんから言われました。『最初は五年間で日本語を習得できると思ったが、できなかった。十年たった段階では十五年間で日本語をマスターできると思った。今は新しい五年計画を立てなきゃならない。』管区長は私たちに慰めになるような言葉を言ってくださいました。『日本にきてから最初の百年が一番難しい。その後はもっとうまく行くのだよ。』さあ、袖を腕まくりして始めよう！[85]」

日本に着いたばかりヒルシュマイヤー師は、文化の違いや言葉の壁を痛感していながら、宣教師としてこれからの活動に備えて最大の努力を尽くす決意を持っていたことは、旅行談の締めくくりの言葉からうかがえる。「しか

し、本当の慰めになるのは、日本人をキリスト教に導くのは私たちの苦労ではなく、神の恵みであるという意識です。私たちは神の道具に過ぎません。私たちの仕事が全部不器用であっても、神の栄光のため最善を尽くすならば、すべては上手く行くのです。また、もう一つ大変喜ばしいことが分かりました。それは、日本人の信者は信心深く熱心であり、平均的なドイツ人よりも絶対間違いなく優れているということです。そのような人々をキリストに導くために、『日本語との三十年戦争』にしてもどんな犠牲的行為は惜しみません。そのために親愛なる皆さまのご協力をお願いします。正義の太陽であるキリストが日出ずる国の上に登りますように！（強調は原文ママ）[86]」

終わりに

ここまで、一九五二年の春、日本に向けてドイツを出発したヒルシュマイヤー師が二か月間の旅行中に見聞きしたことについての記述を見てきた。ヨーロッパから日本まで十数時間しかかからない現代の人にとっては、ヒルシュマイヤー師の二か月間の旅は昔話のように聞こえるかも知れない。しかし、その長い旅の間、様々な新しいものをゆっくり見て、またそれについてゆっくり考えることは、とりわけ一生涯宣教師として日本で働くことを目ざしていたヒルシュマイヤー師にとって貴重な経験であったと思われる。

この旅行談の内容からわかるように、親族や学友と別れて国を離れる悲しさと同時に日本での将来の活動についての抱負や期待を胸に抱いていたヒルシュマイヤー師の気持ちは複雑なものだったに違いない。現代と違って、交通があまり便利ではない時代には、また修道会の方針で帰国休暇はそう頻繁にできない時代には、宣教師として生涯外国で生活し働くということはそう簡単なことではなかった。特に母親や親族との別れ、神言会の兄弟会員との

別れ、そして故郷との別れについての記述から分かるように、ヒルシュマイヤー師にとって確かにつらいことであった。しかし、それと同時に宣教師としての自覚もあり、見知らぬ世界に飛び込もうとする彼を支える深い信仰心もあった。特にヴェネツィア、フィレンツェ、そしてローマでの教会周りや祈りは彼にとって大きな励みと慰めになっていた。

また、ヒルシュマイヤー師にとって宣教師としてもう一つ大きな頼りとなっていたのは、神言会兄弟会員であった。ドイツの神学校の会員やローマで勉強中の同級生、あるいは旅の途中で訪問した神言会会員との連帯感が強くて、大きな支えになっていた。ヒルシュマイヤー師の旅行談に出てくる面白味のある話のエピソードからもわかるように、特に旅仲間、後に神言会や南山学園での活動の協力者仲間となったトルッケンブロード師との関係の中にその人間味も見られる。

最後に、旅行談の記述からもわかるように、ヒルシュマイヤー師は将来の抱負や高い期待を持っている若い宣教師として理想的な考え方もあったが、同時にものを現実的に見る面もあった。シンガポール、香港、フィリピン、日本で見聞きしたこと、見知らぬ世界と人々との出会いについては、表面的な文化の違いだけではなく、特に京都御所や平安神宮で見た建築と芸術の根源にある精神的な面も美術的な感受性と異文化に対する理解をもって記述している。また、旅行談の締めくくりの記述からもわかるように、日本に到着したばかりのヒルシュマイヤー師は日本文化の理解と日本語学習についても現実的な目で見詰めていた。特に日本語の学習を『三〇年戦争』に例えながら、将来の活動のためにその大切さを充分理解して、実際に達者な日本語ができるようになったヒルシュマイヤー師の意志の強さがこの冗談からもうかがえる。上述したように、ヒルシュマイヤー師関係史料の中にもう一つの興味深い資料として同期生のニュースレターがある。これからの研究課題として、三十年間の近況報告の中にも、ヒ

ルシュマイヤー師の日本での活動について本人がどのように考えていたか、それを宣教師としてどのように自己評価していたのかについて考察し、ヒルシュマイヤー師の旅行談に出てきた宣教師と人間としての全体像の詳細に肉付けをしていきたいと思う。

註

（1） ヨハネス・ヒルシュマイヤー著　川崎勝［ほか］編　『工業化と企業家精神』　日本経済評論社　二〇一四年。

（2） 岡部桂史・奥田太郎　編『ヒルシュマイヤー著者集刊行記念シンポジウム二〇一四年講演録「工業化と企業家精神――ヨハネス・ヒルシュマイヤーの時代――」』　南山学会　二〇一五年三月。

（3） 南山大学社会倫理研究所・南山アーカイブズ編『南山学園史料集　10　「ヒルシュマイヤー著作集　教育論」』　南山アーカイブズ　二〇一五年三月。

（4） 南山アーカイブズ所蔵、15-5ヒルシュマイヤー学長　4下―左ヒルシュマイヤー学長原稿　⑤、⑥、⑫。

（5） J. ヒルシュマイヤー、A. デワルト　著『西ドイツと日本―東西〝優等生社会〟の比較』東洋経済新報社　一九七九年。

（6） Willy Kraus, Erhard Louven (Hrsg). *Johannes Hirschmeier. Die Japanische Unernehmung: Schriften aus dem Nachlaß.* Eine Veröffentlichung des Instituts für Asienkunde Hamburg, 1986.

（7） 南山学園史料室所蔵、15-1 ヒルシュマイヤー学長、15-2 ヒルシュマイヤー学長、15-3 ヒルシュマイヤー学長、15-5 ヒルシュマイヤー学長。

（8） 10 000 Meilen der Sonne entgegen［太陽に向かって万理の旅］、ドイツ語タイプライター打ちＡ４用紙二七枚、南山学園史料室所蔵、ヒルシュマイヤー学長15-2 Dokumente, Privates。以下、10 000 Meilen der Sonne entgegen と省略する。

（9） Klassenrundbrief des Weihekurses 1950 南山学園史料室所蔵、ヒルシュマイヤー学長15-4 Klassenrundbriefe。ヒルシュマイヤー師の記載分は、毎回ドイツ語タイプライター打ちＡ４用紙の一、二枚程度、全部でタイプライター打ち約四十枚がある。

（10） 10 000 Meilen der Sonne entgegen、一頁。

（11） Willy Kraus, Erhard Louven (Hrsg). *Johannes Hirschmeier. Die Japanische Unernehmung: Schriften aus dem Nachlaß.* Eine

Veröffentlichung des Instituts für Asienkunde Hamburg, 1986, S. 36。

（12） 10 000 Meilen der Sonne entgegen、一頁。

（13） 同上。

（14） Lebt denn wohl, und soll's geschehen, daß wir uns nie wiedersehen in der Erdenpilgerzeit, ob wir jubeln, ob wir weinen, Jesu Herz wird uns vereinen, hier und in der Ewigkeit。

（15） 同上、一～二頁。

（16） 同上、二頁。

（17） 同上。

（18） 同上。

（19） 同上、三頁。

（20） アロイス・ヒルシュマイヤーは、けがから回復してから中国の政変のため中国での宣教活動ができなくなったので、数年間フィリピンとオーストリアで働き、そして一九五八年から一九七一年に死去するまでパラグアイで宣教師として働いた。

（21） 当時のオーストリアは第二次世界大戦の戦勝国である英米仏ソの占領地区（ウィーンは共同管理）に分けられ軍政下に置かれ、旅行などの移動をするには軍政の許可が必要であった。「鉄のカーテン」とは、戦後のドイツの占領政策などについての米国が率いる西欧諸国の陣営とソ連が率いる東欧諸国の陣営との間の対立を表す比喩的な表現である。

（22） 10 000 Meilen der Sonne entgegen、三頁。

（23） フランツ・トルッケンブロード（Franz Truckenbrod, S.V.D.）は、一九二三年にハンガリー・ショロクシャール（Soroksár）でドイツ系の家庭に生まれ、オーストリア・メードリングにある神言会のザンクトガブリエル大神学院で哲学・神学を学び一九五〇年に司祭に叙階されて、一九五二年にヒルシュマイヤーと一緒に来日した。日本における主な活動として長崎南高等学校・中学校長、南山高等学校・中学校長を歴任した後、長崎西町教会での宣教司牧に従事していた。二〇〇七年に名古屋で死去。

（24） 10 000 Meilen der Sonne entgegen、三頁。

（25） 10 000 Meilen der Sonne entgegen、四頁。

（26） 同上

（27） 10 000 Meilen der Sonne entgegen、六頁。

（28） 「神のお告げ」。天使ガブリエルが聖母マリアにキリストの受胎を告知したこと。カトリック教会で三月二十五日に祝う祭日。（ルカによる福音書第一章二六節～三八節参照）。

（29） 同上。

（30） 同上。

（31） 10 000 Meilen der Sonne entgegen、七頁。

（32） 10 000 Meilen der Sonne entgegen、七～八頁。

（33） 10 000 Meilen der Sonne entgegen、八頁。

（34） 同上。

（35） 同上。

（36）第二次世界大戦後の西ヨーロッパ、とりわけイタリアでは、共産党が盛んになりカトリック教会と対立していた。
（37）10 000 Meilen der Sonne entgegen、九頁。
（38）10 000 Meilen der Sonne entgegen、一〇頁。
（39）聖アンドレアス。聖ペトロの兄弟で、イエスの十二使徒の一人。古い伝統によれば、ビザンティウム（コンスタンティノープルの旧名）の最初の司教。正教会ではコンスタンティノープル総主教庁の初代総主教とされている。
（40）聖シモン。イエスの十二使徒の一人。古い伝統では聖ユダと二人でメソポタミア各地で宣教した後、ベイルートで殉教したと言われている。
（41）聖ユダ。「タダイと呼ばれるユダ」あるいは「ユダ・タダイ」とも呼ばれる。イエスの十二使徒の一人。古い伝統では聖シモンと二人でアルメニアなどメソポタミア各地で宣教した後、ベイルートで殉教したと言われている。
（42）大聖グレゴリオ。（約五四〇年～六〇四年）。第六四代ローマ教皇（在位：五九〇年～六〇四年）。教皇権威の高揚、異端論駁、神学著書などで知られている。
（43）ピオ十世。「ピウス十世」とも呼ばれる。（一八三五年～一九一四年）。第二五七代ローマ教皇（在位：一九〇三年～一九一四年）。一九五四年に列聖。グレゴリオ聖歌の典礼における利用と信者の頻繁な聖体拝領の奨励、当時はやっていた「近代主義」思想に対する伝統的な教義の擁護などで知られている。
（44）10 000 Meilen der Sonne entgegen、一〇頁。
（45）10 000 Meilen der Sonne entgegen、一一頁。
（46）インドネシアの東ジャワ州の都市ブリタール（Blitar）にちなんで名づけられた「ブリタール」号はオランダの海運会社ロッテルダムロイド Koninklijke Rotterdamsche Lloyd の汽船であった。
（47）10 000 Meilen der Sonne entgegen、一二、一三頁。
（48）同上、一二頁。
（49）同上、一三頁。
（50）同上、一三頁。
（51）同上、一四頁。
（52）同上。
（53）同上、一四～一五頁。
（54）同上、一五頁。
（55）同上、一六頁。
（56）「聖体拝領前の断食・断飲」。カトリックでは、ミサの中で聖体拝領する前から断食・断飲する習慣がある。その当時、前の日の夜十二時からあらゆる食べ物と飲み物（水も含めて）は禁止されていた。この規則は後に数回にわたって緩和され、現在では聖体拝領する一時間前から食べものと水以外の飲み物を控えることになっている。
（57）10 000 Meilen der Sonne entgegen、一六頁。

(58) 同上。
(59) 同上。
(60) 同上、一七頁。
(61) Leise rieselt der Schnee（雪がさらさら落ちる）。ドイツ語の代表的なクリスマスの歌の一つ。Leise rieselt der Schnee, still und starr liegt der See, weihnachtlich glänzet der Wald, warte nur, Christkind kommt bald.
(62) 10 000 Meilen der Sonne entgegen、一七頁。
(63) 同上、一八頁。
(64) 同上。
(65) 同上。
(66) 同上、十九頁。歌詞については、上述の三頁を参照。
(67) 「聖霊降臨」（Pfingsten）。イエスが復活後五十日目（ユダヤ教の五旬祭）に使徒たちの上に聖霊の力が降り、これに力づけられた使徒たちが宣教活動を始めたことを記念する大祝日である。聖書はその出来事を次のように記述している。「五旬祭の日が来て、かれらがみな一緒に集まっていると、突然、天から激しい風が吹いてくるような音が聞こえ、彼らが座っていた家にみち、火のような舌が現れ、分かれて、おのおのの上にとどまった。すると、彼らはみな、聖霊に満たされ、霊がいわせるままに、いろいろの国の言葉で話し始めた」（使徒言行録2・1－4）。
(68) 10 000 Meilen der Sonne entgegen、一九頁
(69) 同上、二十頁。
(70) 同上。
(71) 同上、二一頁。
(72) 同上。
(73) 同上、二二頁。
(74) 「ブルー・シスター（聖霊会）」。正式の名称は「聖霊奉侍布教修道女会」であるが、修道服が青（ブルー）であるということから「ブルー・シスター」とも呼ばれている。一八八九年に神言会創立者アーノルド・ヤンセン（Arnold Janssen, S.V.D.）師によって師創立された修道会として神言会と姉妹会という関係にある。なお、一八九六年に同師によって創立された「永久礼拝聖霊会」もあり、修道服が桃色であるということで「ピンク・シスター」と呼ぶこともある。
(75) 同上、二三頁。
(76) 同上、二三頁。
(77) 同上、二四頁。
(78) 同上、二五頁。
(79) 同上。
(80) 同上。
(81) 同上、二六頁。
(82) 「マニフィカト」。聖母マリアが歌った賛美の歌（ルカによる福音書一章四六節～五四節参照）。
(83) 同上、二六頁。

10 000 Meilen der Sonne entgegen「太陽に向かって万里の旅」

（84）同上、二十七頁。

（85）同上。

（86）同上。

what turned out to be a thirty-year long engagement with Japan. Other documents in the personal papers, a series of annual newsletters shared with this ordination classmates describing Hirschmeier's activities in Japan from 1951 to 1981, will further flesh out our understanding of Hirchmeier the man and missionary and will be the subject of a further study.

10 000 Meilen die Sonne entgegen (10,000 Miles towards the Sun): The Japan Travelogue of Johannes Hirschmeier, S.V.D., Third President of Nanzan University.

Richard Szippl

Abstract

Rev. Johannes Hirschmeier, S.V.D., third president of Nanzan University, was well-known in his own time as an educator and scholar of Japanese business history and often in demand as lecturer and commentator on contemporary Japanese society both in Japan and abroad. The present article, which is based on an unpublished German-language manuscript found among his personal papers held in the Nanzan University archives and which describes his two-month journey to Japan by rail and sea in May and June of 1952, gives us a glimpse of Hirschmeier as a young missionary at the beginning of his life's work in Japan. The manuscript is in the form of a twenty-seven page letter addressed to his "dear friends," and bears the title "10 000 Meilen die Sonne entgegen (10,000 Miles towards the Sun)." It not only describes the various sights and experiences encountered along the way, but also reveals his mixed feelings about the journey: the sad leave-taking from his relatives, friends, and homeland contrasted with the enthusiasm and idealism of the young missionary setting out into the world. It also shows how he found spiritual support and encouragement in visiting the holy sites of Rome, the center of Catholicism, and in the fellowship of the confreres of his congregation whom he encountered along his journey. Furthermore, his descriptions of the people and sights he encountered reveal not only a fascination with the newness of it all, but also the realization of the importance of understanding the underlying cultural and spiritual elements of society. The document thus gives us a picture of Hirschmeier at the beginning of